

(トップページ:<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/>)

(GCC:<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/GCCgeneral.html>)

(サウジアラビア:<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/SaudiArabia.html>)

(UAE:<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/UAE.html>)

(カタール:<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/Qatar.html>)

マイライブラリー:0303

ブログ「アラビア半島定点観測」

(注)本稿は 2014 年 3 月 7 日及び 9 日にブログ「アラビア半島定点観測」に掲載した記事をまとめたものです。

2014.3.9

前田 高行

(ニュース解説)サウジアラビア等3カ国が駐カタール大使を召還—埋まらぬ GCC の亀裂

1. 突然の大使召還



3月5日、サウジアラビア、UAE 及びバハレーン3カ国はカタール駐在の大使を召還すると発表した¹。大使召還は外交問題をめぐって対立する当事国が相手国に抗議の意思を示す手段であり中東では珍しいことではない。しかし一般的に言えば大使召還は対立が誰の目にも明らかなケースが多く、堅固な結束を誇る GCC 内部で、しかも3カ国が同時に大使を引き揚げると言うのは尋常ではない。一体3カ国とカタールの間に何があったのだろうか？

直接のきっかけは前日の GCC 外相会議だった。会議後の共同発表ではシリア・アサド政権の退陣を要求することで一致団結の姿勢を打ち出したが、会議そのものは地元紙が大荒れ(stormy)だったと報じており、サウジアラビアと UAE は同盟国に内政干渉内政しているとカタールを激しく責め立てたようである(サウジアラビアの強い庇護のもとにあるバハレーンは尻馬に乗ったものと思われる)。内政干渉とは二日前の3月3日に UAE 連邦法廷がカタール国籍の Mahmud Al Jidah に対しムスリム同胞団に資金を提供したとして7年の懲役刑を宣告した事件のことを指している²。一方カタールは3カ国の大使召還措置に遺憾の意を表明しつつも、それぞれの国に駐在する自国大使の召還は考えていない、と述べている³。

カタールはハマド前首長の時代、特に「アラブの春」と呼ばれリビア、エジプト、イエメンなど中東北アフリ

カ(MENA)一帯に民主化の嵐が吹き荒れた2011年前後に、イスラム諸国の民主化運動について他のGCC各国とは大きく異なる外交政策を取った。それはハマド自身の欧米先進国向けのスタンド・プレーの色彩が強く、本来カタール自身を含めたGCCの絶対君主体制とは矛盾するものであった。彼はエジプトの一大宗教勢力であるムスリム同胞団に肩入れし、息のかかった国営メディア「アル・ジャジーラ」を駆使してイスラム民主改革運動のパトロンたらんとしたのである。

しかし他のGCC諸国、特にサウジアラビアとUAEはハマドのスタンド・プレーに危うさを感じ取っていた。イスラム諸国の民主化運動がいずれ自分たち湾岸君主制国家に跳ね返ってくるに違いないと見たからである。そのハマドが昨年6月、息子のジャーシムに首長位を禅譲した。お坊ちゃん育ちの新首長は首相以下主要閣僚を若手にすげ替え父親とは異なる穏健な外交政策で船出した。他のGCC諸国もカタールの新首長を好感しGCC6カ国の結束は修復したように見えた。それをさらに確かなものにするため12月のGCCサミットに先立ち、クウェイト首長の呼びかけでアブダラー・サウジアラビア国王とジャーシム・カタール首長はリヤドでミニ・サミットを開き、GCCの将来について合意に達した。そして12月のサミットは大きな波乱もなく終わったのである(但し、GCCを「同盟(Union)」に格上げしようとするサウジアラビアの方針に対してオマーンが強硬に反対するという別の問題は抱えたままであるが⁴⁾。

しかしサミットからわずか3か月、GCC内部の亀裂が再び表面化した。

2. 対照的なムスリム同胞団への対応

サウジアラビアは3月7日、ムスリム同胞団をテロ組織と断定すると公式に発表した。エジプトに本部を置くムスリム同胞団は独裁者ムバラクの失脚後に民主的な選挙で政権を握りながらわずか1年で崩壊した。そのムスリム同胞団に対してカタールとサウジアラビア・UAEの対応は対照的である。



そもそもムスリム同胞団がエジプト軍事政権時代に弾圧非合法化された時、同胞団の指導者の一人カラダウィ師(写真)の亡命を受け入れたのがカタールのハマド首長(当時)であった。ハマドは「窮鳥懐に入らば獵師もこれを撃たず」として亡命を受け入れたばかりでなく、「アラブの良心」と自負するアル・ジャジーラTVでカラダウィ師がエジプト初めアラブ全域のムスリムに説教する場を与えたのである。ハマド一流のパフォーマンスであることは言うまでもなく、アラブ一般大衆のみならず西欧でも彼の評価は急上昇した。

しかしサウジアラビアとUAEの保守的な指導者達はムスリム同胞団の勢力拡大に大きな懸念を抱いていた。同胞団がスンニ派イスラム原理主義組織の精神的支柱となっているからである。そもそも両国は世俗国家であり宗教勢力とは相容れない。カタールも本質は同じ世俗国家であるにも関わらずムスリム同胞団を支援していることはイスラム過激派の浸透を必死に食い止めるサウジアラビアやUAEにとっては許しがたいのである。

そのような中で2011年の「アラブの春」がエジプトに波及、独裁者ムバラクが倒れ民主的な選挙でムス

リム同胞団が政権を握った。民主主義を金科玉条とする欧米はこれを歓迎し、カタールにとってはまさに外交上の大勝利だったはずである。サウジアラビアとUAEもムルシ政権を表だって批判できず静観する他なかった。しかしムルシ政権下で同胞団の仲間を重用する縁故主義(ネポティズム)がはびこり経済失政も重なって国民は離反、政権はわずか1年で倒れた。カタールはその間ムルシ政権を支えたが、結局80億ドルの支援をどぶに捨てたのである⁵。替わって誕生した軍部を背景とする臨時政権に対して今度はサウジアラビア、UAE及びクウェイトがこれまでに合計150億ドルの支援を行って現在に至っている⁶。

カタールはサウジなど3カ国の大使召還に対して同様の対抗措置をとる姿勢は示していないが、ムスリム同胞団に対する支援を止める気配はない⁷。カタールとしてはこれまでの外交政策を手のひらを返したように変更できない、ということであろうか。背後には「国父」として院政を敷いていると思われるハマド前首長の意向が見え隠れする。

GCC6カ国の中でオマーンとクウェイトは今のところ中立の立場である。このうちオマーンはGCCのユニオン(同盟)化を画策するサウジアラビアに反発しており、今回の騒動では傍観者の立場を取るとされる。オマーンはこれまでもGCC内部では孤高の姿勢を取るのが通常であった。結局カタールとサウジアラビア・UAEの仲を取り持つのはクウェイトということになる。同国はこれまでGCCのいずれの国ともケンカせず無難な外交を行っているので仲裁役には最適であろう。因みにクウェイトのサバーハ首長は手術静養(病状は不明)のためニューヨークに滞在中である。帰国次第直ちに仲介に乗り出すつもりであろう。

以上

本稿に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

前田 高行 〒183-0027 東京都府中市本町 2-31-13-601
Tel/Fax; 042-360-1284, 携帯; 090-9157-3642
E-mail; maeda1@jcom.home.ne.jp

¹ Arab Times on 2014/3/6, 'KSA, Bahrain, UAE recall ambassadors from Qatar'

² Khaleej Times on 2014/3/6, 'UAE, Saudi Arabia and Bahrain recall envoy from Qatar'

³ Gulf Times on 2014/3/6, 'Qatar regrets envoys recall by three GCC states'

⁴ 拙稿「綻びの目立ち始めたGCC」(2013年12月)

<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/0293GccSummitDec2013.pdf>

⁵ Gulf Times on 2013.4.11, 'Qatar in extra \$3bn aid offer to Egypt'

⁶ Khaleej Times on 2013/7/12, '\$12 billion aid for Egypt is only a temporary boost'

Arab News on 2014/2/21, 'Egypt to receive \$3 billion in aid soon'

⁷ Arab Times on 2014/3/7, 'Qatar won't bow---- will adhere to foreign policy'